

簡易小學讀本

木澤成肅編輯
丹所啓行

四

大日本教育會館			
三			二
六册	九號	三架	五函

178
3
38

檢定合格本

K120.8
5a
4

木澤成肅
丹所啓行
編輯

卷四

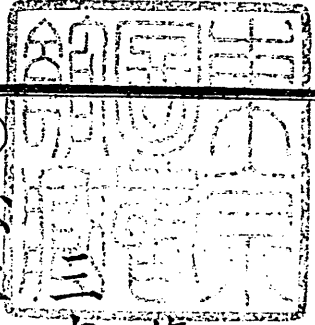
簡易小學讀本

東京

二書堂藏梓

U28854

簡易小學讀本卷四



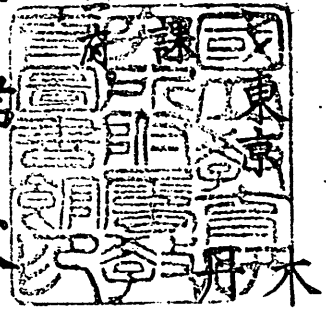
第一

○松太郎君 君ノ父上ハ 何所ニ行

カレシヤ。

○僕ノ父ハ 商用ノ爲メニ。 遠方ニ

行ケリ。



木

澤成肅
所啓行

編輯



簡易小學讀本 卷四

○然ラバ 何項歸

リ給フゾ。

○未ダ 歸リノ程

ハ 分ラズ。 東京

ト 西京ト 大阪

ノ三府ヲ經テ。 後

ニ歸リ來ル ツモ

リナリ。



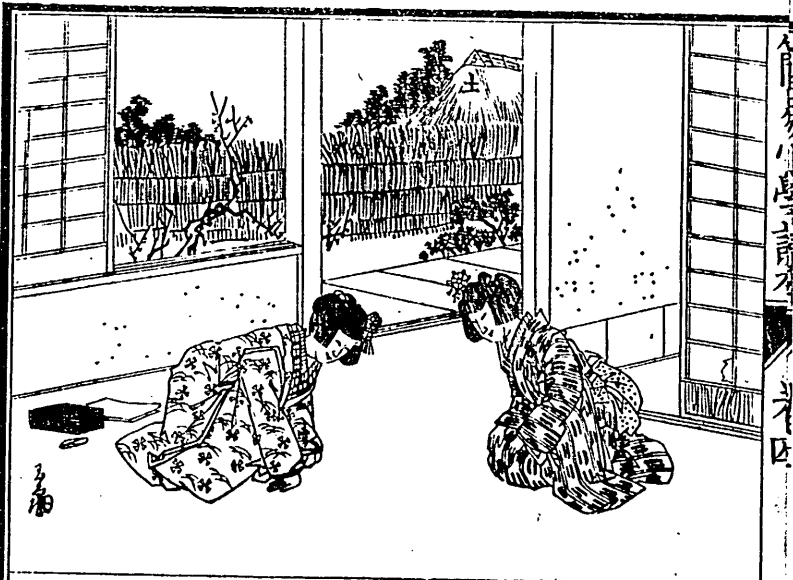
第二課

女兒の遊。 女兒の遊。

○お常お時の 二人の女兒。 お客ご
とをなして 遊べり。

○お常は 障子の外より。 御免なご
りませと いひながら。 障子をあげ
内に入る。

○お時は 出で迎へ。 お常に向ひて



坐し。手をつき
ていふ。お常さま
能くお出でな
さりました。今す
こし 此方コナタへ。お
進みくださりませ。
○お常も 又 手
をつきていふ。其

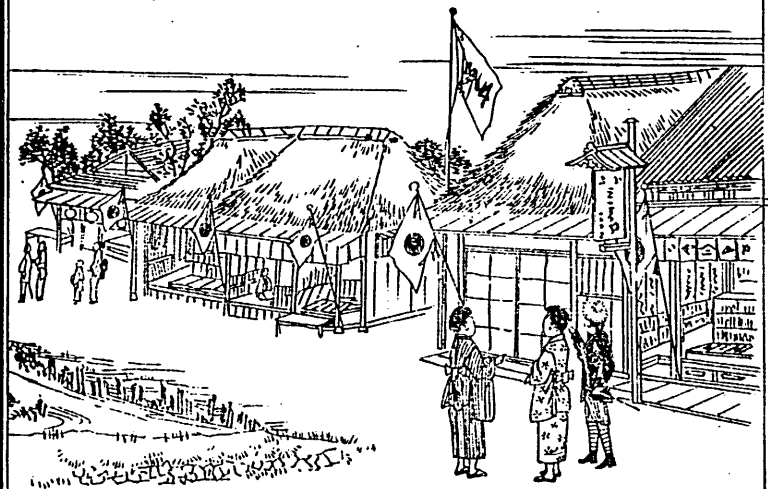
後は。大きに。御無沙汰を 致しま
した。お父さまも。お母さまも。お
變りは ありませんか。時 有り難く存
じます。皆無事にて 暮らします。
あなた の 御両親さまは。常 二人とも
無難であります。私は 少しあな
たに お願いがあります。何にてあ
りますか 常 ね大事の、畫學本を 少

ーみせて 下ださ
りませ。

第三課

紀元節。紀元節。

○今日ハ 二月十
一日ニシテ。 村里
戸毎ニ。 日ノ丸ノ
旗ヲ出ダシ。 紀



元節ヲ 祝フ所ナリ。

○紀元節ハ。 神武天皇 位ニ即キ給
ヒシ 日ニシテ。 今茲^{コトシ}明治二十年ナレ
バ。 紀元二千五百四十七年ニ當ル。

第四課

神武天皇の東征。 神武天皇の東征。

○神武天皇は。 今上天皇の 御先祖
なり。 日向の國に 生れさせ給ひー



が。今の畿内の地に。悪しきものども多く住み。良き民を悩まし、と聞き給ひ。舟師をたこして。其あるものを討ちたがへ。大和

國 橿原といふ地に。宮を造り 天皇の位に即き給へり。

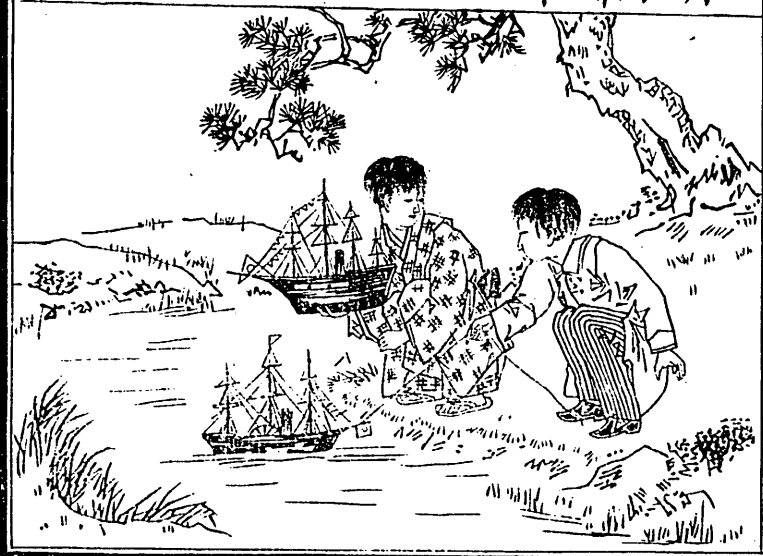
第五課

男子ノ遊。男子の遊。

○爰ニ 小サキ池アリ。英吉 雄五郎ノ 二男兒ハ。各、玩物ノ小舟ヲ。携へ來タリ。池ニ浮ベテ遊ベリ。雄英吉君 君ノ舟ハ。何ト名ヅケシゾ 英

僕ノ舟ハ 日出艦
ト名ツケタリ。雄然
ラバ僕ノ舟ハ。神
風艦ト名ツケン。英
イザ海軍ノ操練ヲ
セシ。雄君ハ軍歌ヲ
歌へ。

第六課



其二

我が軍艦グンカンの旗ハタドるー。

世界セカイをてらす朝アサ日ヒかけ。

美ミーむらさきの起オキり来キて。

光ヒカリをたほふ事コトあらば。

我ワレらは風カゼと身ミをなして。

拂ハラひつくさん敵テキの舟フネ。

敵艦テキカンあまた圍カコむとも。

我にも堅^{カタ}き日出艦。

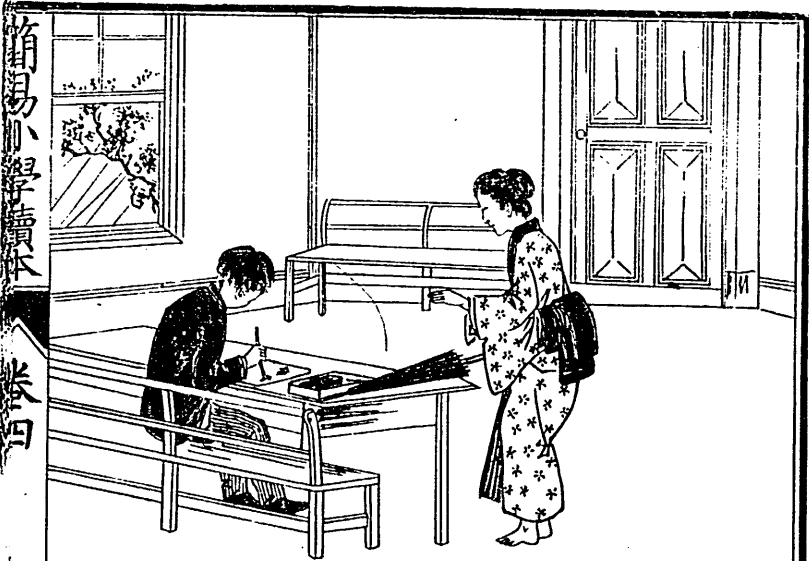
神風艦の二船ありて

拂^{ツク}ひ盡^{ツク}さん敵の百^{ヒャク}船^{フネ}。

第七課

受取ノ文。返取の文。

○午前ハ空晴レテアリシニ。午後
ニ至リ 雨降り出ダセリ。
○爰ニ居ル生徒ハ。 學校ノ扣所ニア



リテ 何事ヲナス
カ。

○今我が家ヨリ
人ニ頼ミ。 傘ヲ届
ケタレバ。 受取ヲ
書キテ。 使ノ人ニ
渡ス所ナリ。

記

一傘 寺本

若正、請取之也

ト認メ。我ガ姓名ヲ 下ニ記シ。使
ノ人ニ渡シ、ハ。傘ノ届キタルコト
ヲ 知ラセントスルナリ。

第八課

猿。猿

○猿ハ 山中ニ産スル 獸ニシテ。

果物ヲ好ミ。山林
ニ 果物ノアルヲ
見レバ。是ヲ取り
去ルコトアリ。人
其猿ヲ容易ニ。捕
ヘ得ルアタハズ。
○然レドモ人ハ
手段ヲ用ヒテ。猿



ヲ捕へ得テ。家ニ 養ナフトキハ。能ク馴レ 好ミテ人ノ真似ヲナス。故ニ踊ヲリヲ教へ 人ニミスルモノアリ。

第九課

鳥獸ノ羽毛。 鳥獸の羽毛。

○凡ベテ獸類ハ 全身ニ毛ヲ生スルコト。人ノ衣服ヲ着タルト 異ナルコトナシ。



○鳥類ニモ 亦羽毛アリテ。全身ヲ覆へリ。
○人ニハ 獸ノ如キ 毛モナク。又鳥ノ如キ 羽毛モナシ。故ニ衣服ニヨリテ 寒サ暑サ

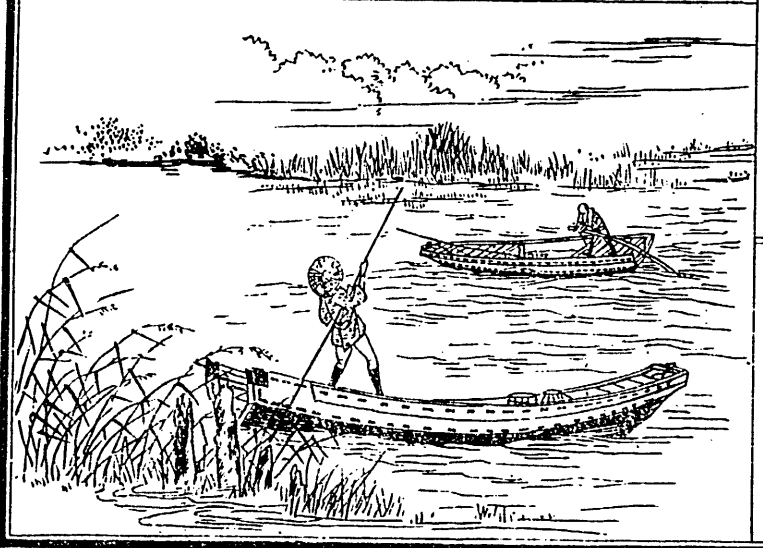
ヲ凌グナリ。

第十課

小舟。小舟。

○ 小き舟は 棹に
てもこぎ。 櫓にて
もこぐ。

○ 棹は水の浅き所
に用ひ 櫓は深き



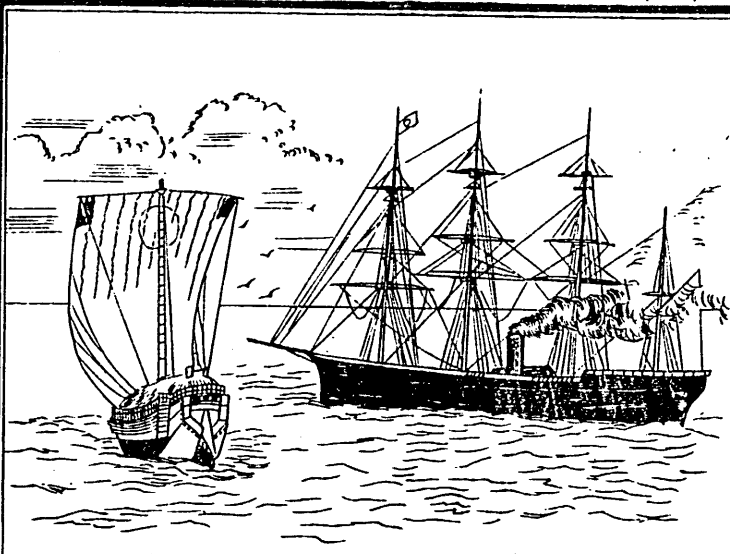
所に用ふ。

○ 棹にては 川底を突き。 櫓にては
水を推して行くなり。

第十一課

大船。大船。

○ 大キナル船ハ 帆ニテ行クモノト。
仕掛ニテ走ルモノトアリ。
○ 帆ニテ行クモノヲ 帆前船トイヒ。



仕掛ケニテ走ル
モノヲ 蒸氣船ト
イフ。

第十一課

其二

○帆前船は 布に
て。作りたる帆を。
檣に結び付けし

ものにて。風をうけ 行く船なり。

○蒸氣船は。船中に 蒸氣器械を
仕掛け。其蒸氣の力によりて 走る
船なり。

○右の二船は。人の力を借りずして。
走り行くものをれども。風と蒸氣
との力を。借ることを 發明せしは。
人の考へより 出でしものなり。

第十一課

其三

船のへききに

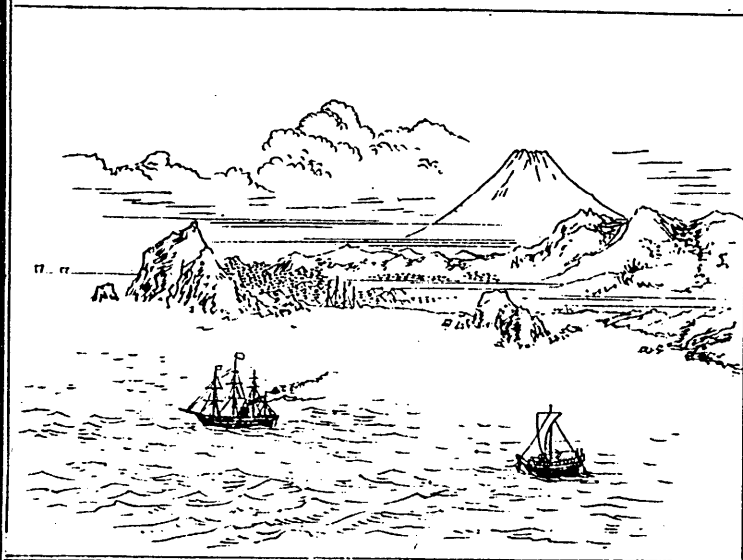
まら見れば。

横濱 港ミナト

遠ざかり。

遠ハルかに見ゆる

富士のねは。



夏も白雪踏みける。

西へ走りて七十里。

遠トホつ近江の海原ウチノハラを。

越ノグして紀の海遠りゆき。

神戸の港へ着きにけり。

第十二課

蜜蜂ト阜蝨ノ話。

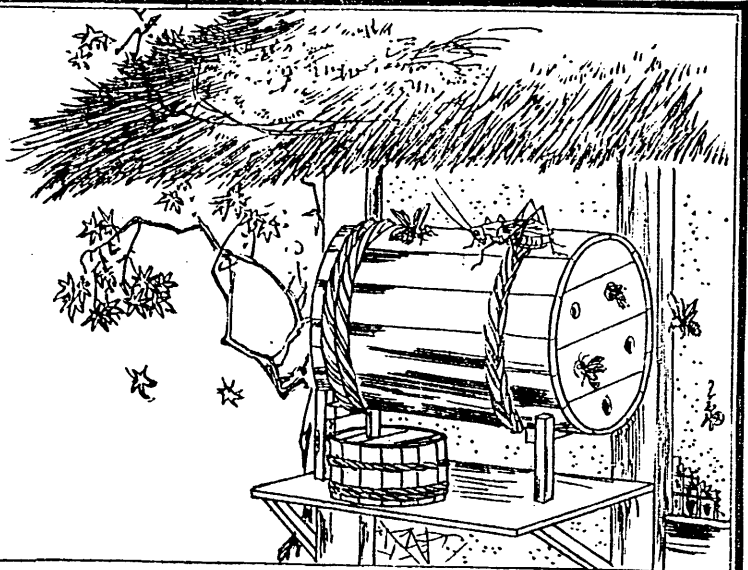
蜜蜂と阜蝨の話。

○冬己ニ 近ヅキ。野ノ草ハ 霜ニ

週三。 秋ノ景色モ 老イニケリ。

○爰ニ 一匹ノ阜蝨アリ。 蜜蜂ノ巢ニ至リ。 首ヲ低レ 乞ヒテ曰フ。 私今日 食物ガナクシテ。 餓エ死ナントス。 何卒 蜜ノ餘リアラバ。 少シニテモ賜ハレト。

○蜜蜂 是ヲ聞キ。 阜蝨ヲ 詰リテ曰フ。 汝モ夏ノ食物 多キ時ニ在シ



ナラン。 何故 今
日ノ用意ヲセザリ
シゾ。

○阜蝨 首ヲ搔キ
ツ、 答ヘテ曰フ。
私ハ 夏ノ頃
食物ノ十分アル故
ニ。 イツモ 斯ク

アラント。或ハ飲ミ或ハ食ヒ。或ハ
歌ヒ或ハ舞ヒ。日々遊ヒテクラシタ
リ。

第十三課

其二。

○蜜蜂又曰フ。我等ハ 其方ノセシ
ニ異ナリ。何如ナル 夏ノ暑キ日ニ
テモ。彼方^{カナタ}此方^{コナタ}ト 飛ヒ遶グリ。花

ノ露アレバ 勉メ
テ 巢ノ中ニ。運
ビ入レタリ。故ニ
今食物ニ富メリ。
然ルニ 汝ハ後ノ
考ヘモセズ。今日
ニ至リ 餓ウルハ。
自ラ招キシ災ナリ。



サレドモ 困窮スルモノヲ 恵マサルハ。 我カ心ニ快カラズトテ。 少シク 蜜ヲ 分チ與ヘタリ。

第十四課

人ノ食物。人の食糧。

○我ガ國ノ人ハ。 米麥ナドノ穀物ヲ 常食トシ。 野菜肉類ナドヲ 交ヘ 食フ。 此等ノ品ハ。 何レモ カヲ勞



シテ。 取ルニアラザレハ 得ベカラズ。 穀物 野菜ハ 田畠ニ作り。 鳥 獸魚類ハ 或ハ捕ヘ 或ハ養ナフ。 多クノ人々 皆働ラキ勉メテ 食物

ヲ得ルナリ。

第十五課

燕の巢。 燕の巢。

○多くの燕が 何か啣みて。 家毎に
入れり。 燕は何をなすか。

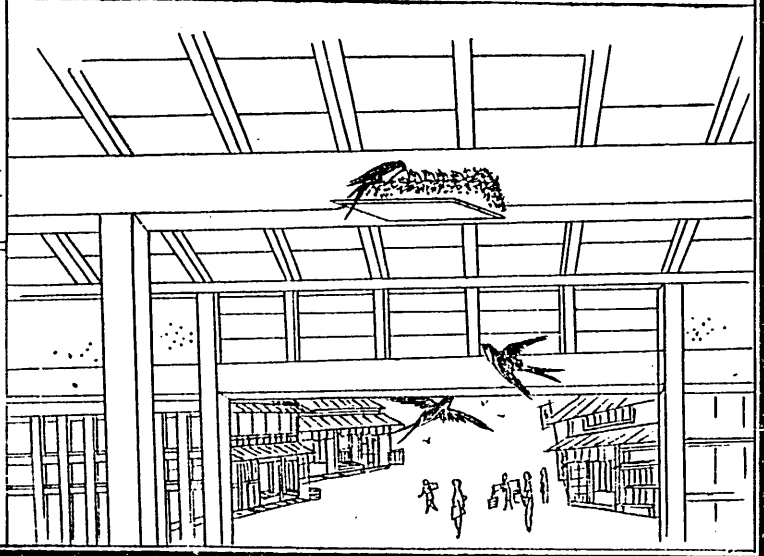
○燕は 人家の 鴨柄の上に。 巢を
作らんとす。

○燕は 秋去り春來る。 小鳥にして。

多くは 五六月の
比 巢を作り 子
を産む。

○燕は巢を作るに
嘴を以て。 日々

泥。 藁鳥の毛などを
啣み來り。 泥を混じ
あはせて。 其内に



雛を養ふべき。堅固なる巢を營むこ
とに。力を盡す。

○巢を營みをはれば。其中に卵を産
み。卵のかへる時は。親燕 日々飛
び出で。蟲などを捕へ來り。雛に
與へ 養育し。成長するを待ちて
巢を去る。燕の如き小鳥にても。其
巢を作ることは 眞に巧なり。



第十六課
家。家。

○日本ノ人ハ多
ク 木造ノ家ニ
住ム。四方ヲ土ニ
テ塗りタルモノヲ
土藏ト云ヒ。火
災ヲ防グニ宜シ。

簡易小學讀本 卷四

十六

瓦屋根ノ家ハ 市街ニ多ク。茅屋根ノ家ハ 村里ニ多シ。近頃 市街ニテハ 石造煉瓦造リノ家ヲ立ツ。煉瓦ハ 土ヲ焼キテ製スルモノナリ。石造煉瓦造リハ火災ヲ防グニ尤モ宜シ。

第十七課

農父。農父。

○此農夫は何を爲すや。今畠に甘薯

を植うる所なり。

○甘薯は素我が國に産せざりしが。

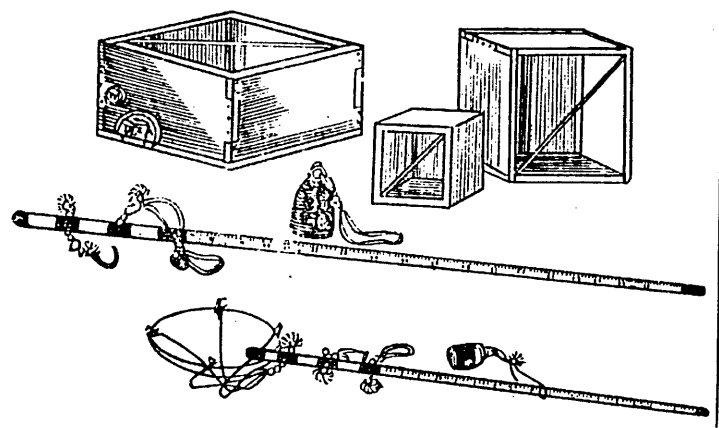
百四十餘年前

琉球より種を求めて作り。諸國に廣まりしなり。

○此農夫は夫婦共



に。能く勉めて耕作す。此田畠は皆
 ちかごろ買ひ入れたるなり。
 ○田畠等の廣さを計るには。六尺四
 方を壹歩といひ。參拾歩を壹畝とい
 ひ。拾畝を壹段といひ。拾段を壹町
 といふ。
 ○今農夫の買ひ入れたる田畠は。壹
 町貳段參畝四歩なり。



第十八課

枱。秤。枱。秤。

○穀物等ノ多少ヲ
 バ。量ル 道具ヲ枱
 トイフ。 其枱ニ大
 小アリテ。 拾勺ヲ
 壹合トイヒ。 拾合
 ヲ壹升トイヒ。 拾

升ヲ壹斗トイヒ。拾斗ヲ壹石トイフ。

○今田畠ヨリ 取り上ゲタル穀類ハ。拾五石六斗七升八合九勺ナリシ。

○物ノ輕重ヲ衡クブル 道具ヲ秤トイフ。其目方ノ名ハ。壹釐ヲ始トスレハ。拾釐ヲ壹分トイヒ。拾分ヲ壹匁トイフ。壹斤ハ百六拾匁トスレドモ。又品ニヨリテ 百貳拾匁ヲ壹斤ト

スルモノモアリ。又千匁ヲ一貫目トイフ。今四斗入り米俵ノ 目方ヲハカリタレバ。凡ソ拾六貫三百目アリシトイフ。

第十九課

日本武尊。日本武尊。

○十二代の帝 景行天皇の皇子。日本武尊東夷を討ち。駿河に至り 遂に夷

賊を平げ。相摸より
 船にて。上總に渡ら
 んとする時。暴風烈
 しく。船覆へらんと
 す。妃橘姫。海神の
 崇りを止めんこと
 て。海に没し給へり。
 ○尊上總につき。



東國の夷を盡く討ちほろぼし。反り
 て碓氷嶺に至り。東南を顧りみ。姫
 を思ひ。あが妻はやとのたまへり。是
 より後。東國を吾孀の國といへり。

第二十課

其二

やよやものども此山は。

碓氷嶺にあらざるか。

揉ミサホふヒメーヒメき我が妻の。

桶タケダケ姫ヒメは香を焚ヒキー。

深き相換の海底に。

もくづとわりーカナ熊クマーヒさよ。

急ウスにヒーも舊ウスき確ヒ氷山。

遙ハダかに隔ハダつ相換サカミ峯ネを。

見るにつけても思オモひやる。

失ウシせにー妻は帰カエりこぞ。

唯ただ白しろの立ち登のぼり。

暖ぬかの雨あめが袖そでにふる。

第二十一課

祖父。祖母。祖父。祖母。

○吾が父母ノ男親ヲ

祖父トイヒ。女親ヲ祖

母トイフ。吾が兩親ハ。

祖父。祖母ノ子ニシテ。



K 120.8

簡易小學讀本 卷四

我ハ祖父。祖母ノ孫ナリ。
 ○祖父。祖母ノ吾ガ父母ヲ。幼キ時ヨリ
 養ヒ教ヘシコト。吾ガ父母ノ我ヲ養ヒ
 教フルニ同ジ。故ニ我ハ父母ニヨク事
 フルト同ジク。祖父。祖母ニモ。ヨク事
 ルナリ。

簡易小學讀本卷四終

簡易小學讀本 四

明治二十年七月十六日版權免許
 同二十一年二月十八日印刷
 同二十一年二月十八日訂正再版出版

定價金六錢

東京府士族

編輯者

木澤成肅

東京府士族

編輯者

丹所啓行

東京府平民

阪上半七

日本橋區本石町十軒店六番地

東京府平民

石塚徳次郎

麹町區麹町三丁目十九番地



發行兼印刷人

發行兼印刷人

簡易小學讀本

木澤成肅編輯
丹所啓行
五

館籍世台育教本日大			
三			二
六册	九號	三架	五函

178
2
38

檢定合格本

K120.8
5a
5